



# 大自然の魔法師アシュト、 廃れた領地でスローライフ 2

α L P H α L I G H T

さとう  
*Satou*



### ディミトリ

「悪魔商人」を名乗る  
ディアボロス族の男性。  
全てが  
怪しすぎる……

### フィルハモニカ

透き通った羽根を持つ  
ハイビクターの少女。  
特技はシロップ作り。

### アシュト

本作の主人公。  
魔法適性が「植物」だった  
ために家を追放され、  
魔境オーベルシュタインの  
領主となる。

### クララベル

元気いっぱいな、  
ローレイの妹。  
姉とアシュトの  
ことが大好き。

### ローレイ

ドラゴンロード王国の  
お姫様。とある事件に  
よりアシュトの村へ  
保護される。

### エルミナ

希少種族  
ハイレア<sup>ヒイレア</sup>の美少女。  
どう見えて  
大のお酒好き。

### ポンタ

ブラックモール族という  
ふわふわなモグラさん。  
鉱石を掘るのが  
大得意。

CHARACTERS  
主な登場人物

## 第一章 アシュトと生命の果実

俺の名前はアシュト。ビッグバロッグ王国の名門貴族、エストレイヤ家の次男。いや、正確には元次男か……代々、強く才能溢れる将軍を輩出してきたエストレイヤ家だが、俺は落ちこぼれだった。魔法適性が『植物』という、ハズレ魔法師だったのだ。

父上に見限られ、幼馴染みで結婚の約束までした好きな女の子——ミュデイが兄の婚約者となったのを契機に、俺は家を出ることを決意。エストレイヤ家が代々管理を任されている魔境の森、『オーベルシュタイン』にやつてきた。まあ結局、兄の婚約はなかったことにされたんだけどね。

俺はオーベルシュタインでのんびり暮らそうと思っていたのだが、そこでたまたま希少種族であるハイエルフの少女エルミナと出会い、周囲の環境がガラリと変わっていく。

他にも銀猫族、エルダードワーフ、デーモンオーガといった多数の希少種族が俺のもとへ集まり、いつの間にか数人の集まりが『村』くらいの規模になった。

そこにミュデイが、怪我をした妹のシエリーを運んできたときは驚いたな……二人とも、家を出た俺を心配して、貴族の生活を捨てて探しに来てくれたらしい。俺はシエリーに嫌

われていると思ったが、そんなことはなかった。様々な誤解<sup>ごかい</sup>が解<sup>と</sup>けた今では、村で一緒に暮らしている。

最近ではハイエルフの里と交易<sup>こうぎ</sup>をするようになって……慌<sup>あわ</sup>ただしい毎日を送っている。オーベルシュタインで始まった新生活は、毎日が充実していた。



朝、俺はにゃんこ少女とわんこ少女に起こされ、総勢八人で朝食を食べる。俺、シェリー、ミューディ、銀猫族の少女ミュアちゃんと魔犬<sup>まけん</sup>族のライラちゃん、薬草少女のマンドレイクとアルラウネ、そして家政婦として働いてくれている銀猫族のシルメリアさんだ。朝食が終わると、俺とマンドレイクとアルラウネ、そして外で寝ていた『植木人<sup>ツリーマン</sup>』ウッドは温室と畑の手入れに向かう。その際、最近一緒に暮らすようになった子狼<sup>ころう</sup>シロのエサを持つていくことを忘れない。シロは家で食べるより、外で食べるのが好きみたいだ。

大樹<sup>たいじゆ</sup>ユグドラシルの下にある狼小屋<sup>おおかみ</sup>にいるシロは、俺を見るなり飛びついてくる。

『きゃんきゃんっ』

『よしよし、エサの時間だぞ』

『きゃううん』

シロにエサをあげたあとは、温室と畑の手入れをする。雑草を抜き、水をあげ、少し弱っている薬草には肥料<sup>ひりょう</sup>を与える。これだけでけっこうな時間が過ぎる。

作業が終わると、マンドレイクとアルラウネとウッドは、ミュアちゃんと合流して一緒に遊ぶ。最近シロを連れていくようになった。

以前はこのまま家で読書<sup>よみかき</sup>をしたり、採取した薬草を調合して薬のストックを作ったり、新薬の研究をしたりしていたんだよな。が、いろんな人から『引きこもり』と言われたのが心に突き刺さったのと、村の住民が俺のために風呂を作ってくれたことで、もっと村のためにできることをしようと思えるようになった。

まず、村の中を見回るようになった。  
そして、それぞれの種族<sup>あいさつ</sup>に挨拶する。

一番よく声をかけるのは銀猫族だ。彼女たちは、エルダードワーフのサポートの他、住民の家の掃除や、食事の支度<sup>しだ</sup>などをしている。最近、村民浴場の掃除もするようになった。銀猫族は五十人いるけど……仕事量に対しての人数が少し足りないような気がしてきた。

次に、エルダードワーフ。彼らは人数も増え、それぞれの仕事に打ち込んでいる。建築班<sup>あいか</sup>は相変<sup>あひ</sup>わらず忙しい。俺が依頼した図書館の建設も始まった。

鍛冶班<sup>か</sup>は、セントウ酒用の水瓶<sup>みずびん</sup>、スライム製の瓶や食器、家具の作製に追われている。

酒蔵班しゅぞうに関しては言わずもがな。この村の命と言っている。力の入れ方がハンパじゃない。

農耕班も同じだ。何しろ、『成長促進』グロウアップをかけた農作物の成長速度は尋常じんじょうではない。ハイエルフたちも手伝って収穫しゆくしている。

そして、魔犬族だ。デーモンオーガのディآمدさん一家が加わったことで、魔犬族の男性は狩りより解体に力を入れるようになった。もちろん、腕を磨くために自らも狩りに出かけることだってある。解体した魔獣まじゅうの肉を銀猫族に届けるのも彼らの役目だ。

魔犬族の少女たちは、裁縫活動さいほうをしていた。服や下着だけでなく、収穫した綿めんを使って布団を作ったり、スライム製の瓶のラベルも作製したりしている。最近は少し余裕が出てきたのか、布製の小物を工作して女性たちにプレゼントしてるようだ。

バルギルドさん一家とディآمدさん一家のデーモンオーガ両家は、狩りに忙しかった。一人でも恐ろしいのに、八人で狩りをするんだ。魔獣が不憫ふびんでしようがない。

家長のバルギルドさんとディآمدさんは毎晩一緒に晩酌ばんしやくし、奥さんのアーモさんとネマさんもよく混ざってお話してる。子供たちとはというと、シンハくんはキンジンぐんに稽古けいこを付けてもらい、ノーマちゃんはエイラちゃんとお泊まり会をよくしていた。

ハイエルフは、里からの移住を募ったこともあって三十人も増えた。先日、彼女たちはブドウ園の拡張かくちやうを依頼してきたんだよね。

なので、ブドウ園を一気に二倍に広げ、ハイエルフの里から持ってきた新種のブドウや、それ以外の果物を植えた果樹園も拡張。エルミナをリーダーとして管理を任せた。

今は新種のブドウを使ったワインや、ブレンドワインの研究も進めてるようだ。

シェリーは、ブドウ園を手伝いつつ、果物を使った氷菓子の研究を始めた。

冷たい飲み物やお菓子があれば、暑い外で仕事をしている村人たちの作業も捗るんじゃないかと、ミュディに相談しつつ試行錯誤しこうかくごしている。兄として応援したい。

ミュディは、裁縫活動に力を入れていた。ちなみに、俺の着てる服や下着はミュディが作った物である。

それ以外にも、ミュディはお菓子作りを銀猫族たちと勉強したり、新作の甘味かんみを子供たちにあげたりして喜ばれている。

村での生活はとても充実していた。

俺も、毎日がすごく楽しかった……

だから、ついつい油断していたんだよね……ははは。



朝、珍しくシェリーとミュディが温室の手入れを手伝ってくれた。

なんでも最近、俺と一緒にいる時間が少ないから、今日は一日俺に付き合うとのこと。  
温室の手入れを終え、シロのもとへ向かう。

狼小屋に行くと、シェリーがかがんで呼びかける。

「しろっ!! おいでおいで」

『きゃんきゃんっ!!』

「わあ、かわいいなあ」

その様子を羨ましそうに眺めるミュディ。

「はは、おいシェリー、ミュディにも抱かせてやれよ」

俺が笑いながら言うと、シェリーは素直に頷いた。

「はい。ほらミュディ、ふつかふかよぉ」

「きゃあ、カワイイ」

シロを抱っこするミュディは、とても幸せそうだ。

子狼のシロはまだまだ小さい。でも、いずれはハイエルフの里にいたフェンリルのような巨体になるのだろうか。こうやって抱っこしてフカフカできるのもそう長くはないかもしれない。

「……それにしても、ユグドラシルか」

狼小屋のすぐそばにそびえるユグドラシルを見ながら呟くと、シェリーが反応する。

「ん、どう見てもフツの木にしか見えないけどね」

「ああ確かに……って、待てよ?」

俺は『ムルシエラ・グレイモウール緑龍の知識書』を開いて確認する。

\*\*\*\*\*

## 《簡単!! エリクシールの作り方》

### ○材料

・マンドレイクの葉 ・アルラウネの葉 ・賢者の石 ・ソーマ水  
・ユニコーンの角 ・古龍の鱗 ・大樹ユグドラシルの枝 ・オリハルコンの鋼  
\*\*\*\*\*

「あ、やつぱり。エリクシールの材料にユグドラシルの枝がある」

用途は、オリハルコンの鍋に入れた材料を、かき混ぜるためみたいだ。

ハイエルフの里ほど大きくないが、このユグドラシルも大樹である。枝を拝借できないだろうか。

俺は、ミュディが抱っこしてるシロに確認してみる。

「なあシロ、ユグドラシルの木から枝をもらいたいんだけど……いいか?」

『きゃんきゃんっ!!』  
わからん。

枝を折ったら悲しい顔をするかも。それとも囁みついてきたりして……  
すると、ミュデイの手の中からすると抜け出したシロは大樹の周りをグルグル回る。  
そして、ひと鳴き。

『きゃんっ!!』

「……いいのか?」

『きゃんきゃんっ!!』

了承するように首を縦に振って吠えるシロ。どうやら、枝をもらってもいいらしい。

と、その時。シロは、ユグドラシルの木に駆け上がり、口で器用に枝を一本ポキッと折った。そして飛び降りると、啜えた枝を俺に渡そうとしてくる。

「おお、ありがとうシロ……ん?」

シロが啜えた枝には果実が実っていた。

「ユグドラシルの果実? ……って、実が生るのか?」

「形はリンゴみたいだね。でも色は黄色……いや、金色? あと、ちよつと小さい……」

「ねえねえ、小さいし、三人で食べちゃおうよ」

首を捻る俺とミュデイに、シェリーがそう提案してきた。その言葉にミュデイが頷く。

「そうだね。ねえアシュト、近くの休憩小屋にナイフがあつたよね」

「おお。じゃあ行くか」

家に帰って子供たちと分けるとかなり小さくなる。せつかくだし、このまま三人で食べちゃおう。

小屋に向かい、ミュデイにユグドラシルの実をカットしてもらう。ついでに、冷蔵庫で冷やしてあるブドウジュースも出した。

「じゃ、いただきます」

カットした実は小さく、一仕事終えたあとの甘味としてはちょうどいい。

口に入れて咀嚼すると、甘い蜜の味が口に広がった。

「うん、美味しいな」

俺が言くと、シェリーも同意する。

「だね。なんか蜜が多くない?」

シェリーの言葉にミュデイが頷く。

「そうだね。それに、普通のリンゴより甘いし、酸味も強いかなあ」  
実は、あつという間になくなつた。

ブドウジュースを飲んでまったり過ごす。

「ふっふっふ。これで三つ目だ」

「何がよ？ お兄ちゃん」

「このユグドラシルの枝だよ。霊葉エリクシールの素材の一つだ」

俺が答えると、ミュデイが聞いてきた。

「そういえば、マンドレイクちゃんとアルラウネちゃんの葉っぱも素材なんだよね？ アシュト」

「ああ。毎日頭の葉っぱをくれるんだ」

あの二人、頭の葉をプチッとちぎって俺に渡すんだよな。痛みはないらしいけど、自分の身体の一部を引き千切る姿はあまり見たくない。それに、現状では使い道がないのも問題だ。スライム製の試験管に保存してあるけど、かなり数が増えてきた。

伝説の薬草がいっぱい……王宮菜園のエルフに見せたら卒倒するぞ。

おやつタイムを終え、村を散歩することにした。

村というか、最近はどうも町と言っているほど建物が増えてきた。ドワーフもこだわりがあるのか、それぞれの住居は形を似せつつも一軒ごとに少しずつ意匠を変えて建築してる。ぶっちゃけ建設を楽しんでるフシがある。

歩いていると、エルミナ、メージュ、ルネアのハイエルフトリオに出会った。

「お、アシュトたちじゃん」

エルミナは手をフリフリして俺たちのもとへ。

エルミナはいつも楽しそうだ。自身の祖父であるザークベッグさんに過去のことを謝り、許しを得てから、さらに元気になったような気がする。

その時ザークベッグさんの口から飛び出た俺とエルミナの結婚云々は、有耶無耶になつたみたいだ……ま、まあその、残念とは思わなくも……うん。

「ようエルミナ、散歩か？」

「まあね。そうだアシュト、またユグドラシルを見に行つていい？」

「ああ、かまわないぞ。シロと遊んでやってくれ」

「もちろん!!」

ハイエルフたちは、俺の農園に植えてあるユグドラシルに、よく祈りを捧げている。

里の物と比べると小さいながらも、ハイエルフの象徴だ。里でもよく祈りを捧げたいらしい。普段はおちゃらけたイメージのエルミナだが、以前見かけた祈りを捧げる姿はとても美しく見えた。

その時のことを思い返していたら、エルミナはこんなことを言った。

「ユグドラシルに祈りを捧げれば、『生命の果実』が実るかもしれないからね」

「……いのちの、果実？」

「うん。私たちハイエルフの長寿の秘訣でもあるのよ？ ユグドラシルの大樹にたった一つ実ると言われている伝説の果実なの」

と、エルミナの説明をメージユが補足する。

「エルフの寿命は数百年だけど、ハイエルフの寿命はほぼ無限に等しい。それは、『生命の果実』を食べたエルフが進化したからだと伝えられているわ」

「……………」

サアー……つと、冷たい汗が背中に流れた。

「え、エルミナ……その、『生命の果実』って?」

「なによシェリー、興味あるの?」

「あ、あるっていうか……」

「ミューデイも、顔色悪いわよ?」

「な、なあエルミナ。その果実を食べるとどうなるんだ……?」

「アシュトまで……」

エルミナは言った。

「『生命の果実』は、長寿の実とも呼ばれてるの」

「……………」

「要するに、『生命の果実』を食べると、寿命がかなり延びるのよ」

「……………」

あー……………ええと。

「ち、ちなみに……どんな形をした実だ?」

「形? 私は見たことないけど、伝承ではリンゴみたいな形らしいわよ」

「……………マジで?」

つまり、やっちゃいました?

どうやら俺たち、かなり寿命が延びたみたいです。



「なあ……るほどねえ……ユグドラシルの果実を食べちゃったの♪」

「はい……その、大丈夫でしょうか?」

「ふふふ♪」

現在、俺とシェリーとミューデイは、『神話七龍』の一体、シエラ様に相談していた。

内容はもちろん、俺たちが食べたユグドラシルの果実についてだ。

すると、シエラ様はどことなく楽しそうに言う。

「おめでとう。キミたちは人間を超えた人間、そうね……ハイヒューマンと名付けましようか。に、なっちゃいましたっ♪」

「……え」

「残念だけど、私でもどうにもならないわ。ふふ、キミたちは人間の新しい可能性に至った……とは言っても、寿命がハイエルフ並みになったくらいだから安心してね。肉体の老化はゆる〜っくりになるから、いつまでも若々しくいられるわよ!」

こうして、俺とシェリーとミュディは、人類の新しい扉を開けた。

かつて、エルフの一人がユグドラシルの果実を食べて、ハイエルフに進化したように。まさか、おやつ感覚で食べた果実でこんなことになるとは……人生わからん。

でも、これは喜んでいいことなのだろうか。長寿ということは、他の人間とは違う時間の流れの中で過ごさなくてはならない。ハイエルフは『自分は長寿なんだ』と幼い頃から理解しているから、それが当たり前だと思える。でも、俺たちにそんな覚悟はできていない。

俺がもっと注意していれば、こんなことには……俺は、ミュディとシェリーの人生を大きく変えてしまった。

「ミュディ、シェリー、本当にすまない……」

もう手遅れ。なら……俺には謝ることしかできない。

しかし――

「え? 別にいいじゃん。ねえミュディ」

「うん。だってそれって、アシュトやみんなとずっと一緒に過ごせるってことだもんね」

「……………はい?」

二人とも、めっちゃ平然としてた。

俺の心配は杞憂だったようだ。

このことを、各民族のみんなに言ったら喜んでいた。

エルミナたちは、ユグドラシルの果実を食べたことを特に咎めず、むしろこれからずっと一緒に村で暮らせると大喜びしていた。そもそも、ユグドラシルに果実が実ったら、俺たちに食べさせるつもりだったらしい。

エルダードワーフたちは「ふーん。まあよかったじゃねえか」で終わり、銀猫族は「末永く、お世話させていただきます」の一言、魔犬族からは「さすがアシュト村長!!」というよくわからないコメントをもらった。デーモンオーガ一家も「おめでとう!!」と言ってたし……みんな長寿種族だからか、深く考えてないみたいだ。

とはいえシェリーとミュディの反応ときたら……なんというか、こいつらも大物だよな。さて、寿命が延びても特に変わらない生活を送る俺たち。

やがてこの村に、新しい種族がやってきた。

## 第二章 花妖精と甘い蜜

ある日の早朝。久し振りに一人で温室へ向かうと、ユグドラシルの樹木の一部が瞬くように光っていた。

『きゃんっ!! きゃんきゃんっ!!』

シロがユグドラシルの樹の周囲をグルグル回って吠えている。

何事かと思い、腰から杖を抜いて近付くと、光源の正体がわかった。

『しっしっ、もうあっち行つてよーっ』

『ううっつ、なんでフェンリルがいるのおっつ』

『ふわぁーん』

それは、全長二十センチくらいの、透き通った羽根を生やした女の子たちだった。

羽根は蝶々のような形をしており、ガラスみたいに透明。そこからキラキラと光る鱗粉を撒いていたのである。

数は三十匹……いや三十人くらいか。シロに吠えられて上の方に避難している。すると、女の子の一人が俺に気付いた。

『ねえねえ助けてよっつ、このワンコなんとかしてえっつ!!』

『あ、ああ……シロ、こっちおいで。ほら』

『くうん』

シロを撫でて大人しくさせ、お座りを命じる。この子は頭がいいので、俺の命令があるまでこのまま動かない。

すると、助けを求めてきた女の子が俺の近くまで飛んできた。

羽根をパタパタさせて顔の前で止まる。

『手』

「て?」

『手を出して、手!!』

『あ、うん』

手のひらを上にして胸の位置まで持つてくると、女の子はその上に着地した。すげえな、まったく重さを感じないぞ。

『助けてくれてありがとう!! 食べられちゃうかと思ったわ……』

『ははは、シロはそんなことしないよ。それより、キミたちは?』

『わたしたち? 見ての通り『花妖精』よ。おいしいマナを求めているんなところを回っているんだけど、ここに生えている樹からすっごく濃くて甘いマナが出てるのに気が付

いたの!! みんなでここに住もうと思って来たら、フェンリルの子供がいて……」  
「……そうなのか」

ハイピクシーねえ……うーん、いろんな種族がいるんだなあ。

樹を見上げると、ハイピクシーの少女たちが枝の上に座ってこっちを見ている。

「へえ……このユグドラシル、あなたと繋が<sup>つな</sup>がってるのね。もしかしてこれを植えたのはあなた?」

女の子が話しかけてきたので視線を戻して答える。

「そうだよ。それと、住むなら好きにしていよいよ。ただ、ここにはいろんな人が住んでるけど、大丈夫か?」

「うん。あんまりヒューマンとは関わったことないけど大丈夫。あなたのお名前は?」

「俺はアシウト。よろしくな」

「わたしはフィルハモニカ。フィルでいいよ!!」

ハイピクシーのフィルハモニカ。

長い金色のストレートヘアに桃色のドレスを着て、透き通る蝶々の羽根をパタパタさせてる。

フィルハモニカは、俺の周りをパタパタ飛び、顔の前で止まった。

「ちゃんとお礼はしてあげる!! 楽しみにしててね!!」



こうして、新しい住人のハイピクシーが加わった。



ハイピクシー。

初めて聞いた種族だが、エルミナたちは知っていた。けつこう昔、ハイエルフの里にも住んでいたらしい。

だが、ハイエルフの里にあるユグドラシルのmanaが薄くなり、よりよいmanaを求めて旅立ってしまったのだとか。

ハイピクシーの個体は全て女性で、出産ではなく分裂に近い方法で増えるそう。主食はmana。俺たち風に言うとなんか魔法そのもの。

しかし飲食は可能で、セントウやブドウ、新しく実ったオレンジやバナナを美味しく食べていた。manaは十日に一度、ユグドラシルの樹に集まって吸収すればいらしく、食事は単なる趣味の一つだそう。

住まいは鳥の巣箱のような家を作って、村の中にある樹木の上に、いくつか設置した。箱の中には小型のベッドや椅子やテーブルも置いてある。もちろん全てエルダードワーフ製。布団や枕などは魔犬族の少女たちに作ってもらった。

たった数日しか経ってないのに、今や、村の中にある木の上はハイピクシーの家でいっぱい。はいだ。

ハイピクシーたちは、村人たちとすぐに馴染んだ。

特に、子供たちとは気が合うのか、一緒に遊ぶことが多い。

『わーいっ!! こっちこっちーっ!!』

「にやうーっ!! まてまてーっ」

「わふーっ!!」

『捕まらないよーっ!!』

「まんどれーいくっ!!」

「あるらうねーっ!!」

ミユアちゃん、ライラちゃん、マンドレイク、アルラウネたちは、ハイピクシーとよく追いかけて遊んでいる。

フワフワ飛ぶハイピクシーたちを捕まえようと、村中を走り回っているのだ。

そんなハイピクシーのリーダー、フィルハモニカ。通称フィルは、俺の肩を椅子代わりにして、のんびりすることが多かった。というか、そこが定位置であるかのようにいつも座っている。

『みんなはユグドラシルからmanaを吸収するけど、わたしはアシュトから吸収してるの』

26

「え、そうなのか？ ……なんで？」

『だって、アシユトを経由したマナは深みがあつて美味しいのよ。この味はお子様にはわからないわね』

「そ、そうなんだ……」

いつの間にか、ファイルに魔力を吸われていたらしい。

俺の魔力って深みがあるのか……よくわからん。



數日後。

ユグドラシルで魔力を補給したハイピクシーたちと、俺から魔力を吸収したフィルが集まり、こんなことを言った。

『アシュト、小瓶をちょうだい』

「小瓶？ 何に使うんだ？」

『言っただでしょ、お礼をするのよ!!』

[?]

とりあえず、言われた通りに小瓶をいくつか渡す。

ハイピクシーは三十人。三人で一個として合計十個の瓶を渡した。元々はジャムを入れるための容器で、サイズはフィルたちより少し小さい。

ハイピクシーのリーダーであるフィルは、仲間たちに号令をかける。

『じゃあみんな、手分けして行くわよーっ!!』

「おーっ!!」

そう言って、森の中へ消えていった。

よくわからないまま見送り、俺は村の外れに向かう。するとそこにはエルダードワーフの  
 アウグストさんと、新しく建設中の建物があった。

「ん……おう村長、どうした？」

「お疲れ様ですアウグストさん。ちよつと気になって……」

「はっはっはっ!! まだ時間が必要だ。もう少し待ってくれや」

「はい。急かしてるようで申し訳ない」

「まあ、村長の希望をふんだんに取り入れた建物だ。絶対に手抜きはできねえ」

そう、今建てているのは俺が依頼した『図書館』である。

ビッグバロッグ王国にある巨大図書館を参考に、アウグストさんに図面を引いても

形は円柱形で、木の支柱を建てて周囲に煉瓦を積み上げていく。内壁一面が本棚となり、

フロアは読書スペースにする予定。階段を設け、階層を作るつもりだ。

図書館が完成したら、ハイエルフ長のチーグベッグさんが書いた本を収める手はずになっっている。

今も、交易の度に大量の書物が送られてくる。それらは今、酒蔵の一つを倉庫代わりにして傷まないように仕舞ってあるけど……余談だが、俺が本を喜んでいたことを伝えたら、チーグベッグさんは歓喜したのだとか。

まあ、本はありがたいので素直に受け取っておく。

作業中のドワーフと銀猫族を眺めていると、アウグストさんが言った。

「あのよ、村長……文句というわけじゃねえんだが、ちと相談がある」

「はい？」

「銀猫族の手伝いはありがてえ。身体能力は高えし重い丸太も難なく持ちやがる。でもよ、やっぱ若え女を手伝わせるのはちとなあ……あの子たちは大工仕事だけじゃなく、オレらの家事や炊事もしてくれるし、さすがに申し訳ないぜ」

「あー……」

現在、銀猫族はドワーフの手伝いと村の手伝いの両方をこなしている。

村の手伝いは、各家庭の家事や農園の整備など、かなりの激務だ。大工仕事だってもちろん大変で、手や指を切った銀猫たちが手当てをしてもらいに診察室を訪れることも少な

くない。

力のある男手が欲しいな……でも、そんなに都合よく人は増えない。

「……なんとか他の人手を増やしたいですけど」

「悪い、そんなつもりじゃねえんだ。忘れてくれ」

アウグストさんは神妙な顔で作業に戻っていった。

難しい問題だ。こればかりは魔法じゃどうしようもない。



家に帰ろうと歩いている途中、フィルが戻ってきた。

『アシュトアシュト、こっち来て!!』

「おかえりフィル。な、なんだ？」

『いいから!!』

フィルに付いて行って到着したのは、俺の家。

玄関前にはハイピクシーが集まっており、家の前に置いてある丸太のテーブルの上に、フィルたちが持つていった小瓶が並べて置いてあった。中には乳白色のトロツとした液体が入っている。

『これ、マナのお礼よ!!』

「フィル、この液体は……?」

『ふふーん。これは『花妖精の蜜』。わたしたちハイピクシーにしか作れない、とーつても美味しいシロップなんだから!!』

「へえ、初めて見たなあ。ちょっと味見していいか?」

『どうぞ!!』

液体に小指を軽く付けて掬うと、まるで糸のようにトローツとシロップが伸びた。

そのままペロツと舐める……不思議な甘さだ。濃厚でトロトロだが喉越しがよく、飽き

が来ずにいつまでも舐められる。これは美味い!!

『花の蜜や森の木の実を碎いて混ぜ合わせて、わたしたちのマナで美味しく味付けしてあるの!! お酒に混ぜればどんな種類でも『花妖精の蜜酒』になるし、パンやクッキーに塗ればたちまち最高級のお菓자에早変わり!!』

「はは、そうなのか?」

『まーね!! 大昔、人間に作ってあげたことがあってね。その時にそう言われたのよ!!』

「へえ……」

フィルは誇らしげに胸を張り、他のハイピクシーたちも嬉しそうに俺の周りをクルクル飛んだ。

それから、ハイピクシーたちは定期的に『花妖精の蜜』を作ってくれた。

驚いたことに、ワインだろうがエールだろうがウイスキーだろうが、このシロップを混ぜるとたちまち蜜酒に変わってしまった。しかも甘くて飲みやすく、ジュースみたいなお酒だ。

また、フィルの言った通り、パンやクッキーに塗ってもとても美味しい。最近、ミューデイがシロップを使った新しいお菓子レシピを考え始めている。

この村でのハイピクシーの仕事は、シロップ作りといったところかな。ちなみに、あとになって次のようなことも明らかにになる。

ビッグバログ王国で、この『花妖精の蜜』が、エリクシールと同列の国宝に指定されているということ。そしてエリクシールが保管されている『神物庫』に、かつてフィルが人間に贈ったという『花妖精の蜜』が保管されているということ。

そんなことも知らず、俺たちはシロップを舐めまくった。

ハイピクシーたちが移住し、村はさらに活気に包まれた。

そういった中、俺の想像を遥かに超えた来訪者が現れたのである。

### 第三章 焔龍<sup>えんりゅう</sup>ヴォルカヌスとサラマンダー族

「ほおお……いいマナで溢れてやがる。さすがはムルシエラゴの眷属<sup>けんぞく</sup>と言ったところかなあオメーら!!」

「「「へいつ!! オヤジっ!!」」」

なんだろう、この野性味溢れる人(?)たちは。

デーモンオーガの両家が狩りで不在の中、いきなり村にやってきたのは、三メートル近い大男と、それに付き従<sup>したが</sup>う赤いトカゲのような人たちだった。

それに対応したのは当然、村長である俺。

護衛<sup>ごゑい</sup>にシェリーを付けて、村の入口で応対する。

村民に不安を与えないために、いつも通りの仕事を続けるようにと事前にミュディに伝令<sup>たの</sup>を頼んでおいた。

そして、俺は緊張<sup>きんぱう</sup>で汗をダラダラ掻<sup>か</sup>きながら大男の前に立つ。

「カッカッカ、そうビビンじゃねえよ。取<sup>と</sup>って喰<sup>く</sup>いやしねえ。ちと昔のダチに話を聞いて、オレも見に来たんだよ」

大男は、俺の肩をバンバン叩く。

「は、はい? つどわあっ!?」

「お、お兄ちゃんっ!」

その力があまりにも強く、体勢<sup>くせ</sup>が崩<sup>くず</sup>れて尻もちをついてしまった。

「そうしやつちよこばるなっ!! 肩のチカラ抜けや!!」

どうやら敵意はないようだけど……

「こら、私のアシュトくんをイジメないでよ」

ふわりと、聞き慣れた声が聞こえた。

俺とシェリーの後ろから現れたのは、いつも通りフワツとした笑<sup>え</sup>みを浮かべるシエラ様だ。

大男はゲラゲラ笑う。

「よおムルシエラゴ。遊びに来てやったぜ!!」

「まったく。相変わらず暑苦しいわね、ヴォルカヌス」

「「……え、ヴォルカヌス?」」

俺とシェリーは揃<sup>そろ</sup>って驚いた。

シェリーの手を借りて立ち上がり、目の前の大男を凝視<sup>ぎょうし</sup>する。

「オレは焔龍<sup>えんりゅう</sup>ヴォルカヌス。よろしくな、アシュト!!」

目の前の大男は緑龍<sup>りよくりゅう</sup>ムルシエラゴ様と同じ……『神話七龍』の名を持っていた。



人数が多いので、大宴会<sup>だいえんかいじょう</sup>場に移動した。

というか、ヴォルカヌス様が連れてきたのは人じゃない。真<sup>ま</sup>つ赤<sup>か</sup>な鱗<sup>りん</sup>に長い尻尾<sup>しっぽ</sup>、顔は龍<sup>りゅう</sup>の如<sup>ごと</sup>き異形<sup>いぎよう</sup>、二足歩行<sup>ふそくほこう</sup>の赤いトカゲのような獣人<sup>じゅうじん</sup>……いや、『亜人<sup>あじん</sup>』だった。

人間<sup>にんげん</sup>の特徴<sup>ていしゆう</sup>を持ち、一部<sup>いぶ</sup>に獣<sup>けもの</sup>の形質<sup>けいしつ</sup>を持つ者たちを獣人<sup>じゅうじん</sup>と呼び、魔獣<sup>まじゅう</sup>の特徴<sup>ていしゆう</sup>を持ち、一部<sup>いぶ</sup>に人間の形質<sup>けいしつ</sup>を持つ者を亜人<sup>あじん</sup>と呼ぶ。似ているようだがまったく違う。

獣人は、人間と交わることが可能だが、亜人の多くは卵生<sup>らんせい</sup>のため、人間と交わることができない。

見た目も生態も人間とは大きくかけ離<sup>はな</sup>れている、独特<sup>どくとく</sup>な種族<sup>しゅぞく</sup>。

せっかく大宴会<sup>だいえんかいじょう</sup>場に移動<sup>いどう</sup>したのに、赤いトカゲのような亜人<sup>あじん</sup>たちは壁<sup>かべ</sup>に沿<sup>そ</sup>って一列<sup>いれつ</sup>に並んで微動<sup>びどう</sup>だにできなかった。接客<sup>きゃくかく</sup>をお願いした銀猫<sup>ぎんねこ</sup>族<sup>ぞく</sup>たちも困惑<sup>くわんごん</sup>してる。

「あいつらは気にすんな。オレの舎弟<sup>しゃてい</sup>として上下関係<sup>じやうげんけい</sup>は叩き込んである」

「は、はあ……」

ヴォルカヌス様の言葉に、戸惑<sup>とまど</sup>い気味<sup>きみ</sup>に返事<sup>へんじ</sup>をする。

大宴会<sup>だいえんかいじょう</sup>場のど真<sup>ま</sup>ん中には一卓<sup>いちたく</sup>の大きな座卓<sup>ざたく</sup>が置かれ、ロックグラスにはシエリーが出した丸い氷<sup>こほり</sup>、その脇<sup>わき</sup>に村<sup>むら</sup>で作ったウイスキーが置かれている。

座卓<sup>ざたく</sup>に着いているメンバーは、俺とシエリーとシエラ様、ヴォルカヌス様と赤いトカゲ衆<sup>しゅう</sup>の代表<sup>だいひょう</sup>らしきゴツゴツのトカゲ男<sup>おとこ</sup>。

俺はウイスキーボトルを掴<sup>つか</sup>み、飲み口<sup>のみぐち</sup>をヴォルカヌス様と赤いトカゲ男<sup>おとこ</sup>に差し出す。

「ど、どうぞ」

「おう」

「かたじけない」

ヴォルカヌス様と赤いトカゲ男用のグラスにウイスキーを注<sup>つ</sup>ぎ、続いて俺とシエリーとシエラ様のグラスにも注<sup>つ</sup>ぐ。

全員<sup>ぜんいん</sup>に行き渡<sup>わた</sup>ったところで、杯<sup>さかずき</sup>を掲<sup>か</sup>げた。

「じゃ、乾杯<sup>かんぱい</sup>」

ヴォルカヌス様はグラスを合わせず、一気に呷<sup>あお</sup>る。

「つか!! なかなかウメエじゃねえか!! なあグラッドよ!!」

「へい、オヤジ」

改めて、ヴォルカヌス様を見る。

年齢<sup>ねんれい</sup>は四十代<sup>しじゅうだい</sup>ほどだろうか。燃<sup>も</sup>え上がるような赤髪<sup>あかみ</sup>、側頭部<sup>そくとうぶ</sup>には無数<sup>むすう</sup>に枝分<sup>えだわ</sup>かれた二

本の角が生えている。

真つ赤な『キモノ』という伝統衣装に身を包み、腹にはなぜか手拭いを巻いていた。グラッドと呼ばれたもう一人のトカゲ男性は、バルギルドさんやディآمدさんに匹敵する体格だが、決定的に違うのは全身に無数の傷が刻まれていることだ。顔にも傷があり、片目が完全に潰れている。まるで歴戦の戦士のような感じ。

すると、シエラ様が言う。

「ところでヴォルカヌス。ここに来た用件はなにかしら？」

「ああ、ちと頼みてえことがあるんだよ。そのアシウトによ」

「え」

指名されたのはまさかの俺だった。

ヴォルカヌス様はグラスを置き、ウイスキーのボトルを掴んでそのまま飲み干して一息。

「ちと風呂入ってくるから、こいつらを頼むわ」

「……は？」

「お、お風呂？」

シエリーが思わずといった風に聞き返すと、ヴォルカヌス様は頷いた。

「おう。最近身体が痒くてなあ……数万年ぶりにひとつ風呂浴びたくてよ。それで、オレが風呂に入ってる間、こいつらをオメーに預ける」

「……か、構いません、けど」

「そうか!! じゃあ頼むわ」

わけわからん。風呂ってなんだよ？

その時、シエラ様がクスクス笑いだした。

「もしかして、地中に潜るのかしら？」

「それ以外、オレを満足させる風呂なんざねえよ!! ま、二千年くらいで戻るから、あとは頼んだぜ」

「……………はい？」

に、にせんねん？

ちよつと待て、どこに行くつもりだ？ 地中？

シエリーを見ると、首を捻っていた。まあそりやそうか。

事情を知ってそうなシエラ様を見たら、笑顔で説明してくれる。

「あのねアシウトくん。この世界の地面の下をず〜〜つと掘り進めていくと、す〜〜つごくドロドロした炎の水が流れているの。ヴォルカヌスはそのお風呂代わりになっているのよ」

「へ、へえ……………」

「ま、そういうこった。なんならムルシエラゴ、オメーも来るか？」

「イ・ヤ♪」

「カッカッカ!! オメーじゃ燃え尽きちまうからな!!」

スケールがでかすぎる。

すると、ヴォルカヌス様は立ち上がり、壁に控えてる舎弟たちにいきなり怒鳴った。

「いいかオメーらああつ!! 今日からオメーらはアシウトの下につけ!! アシウトの手足となつて働けやああつ!!」

「[[[[「へいつ、オヤジ!!」[[[[」

「グラッド、あとはオメーに任せる」

「へいオヤジ!! アシウトの旦那に付いていきやす!!」

「おう。じゃあオレはひとつ風呂浴びてくらあ」

ヴォルカヌス様がそう言った瞬間、今まで微動だにしなかったトカゲ亜人たちが左右縦二列に並び、中腰になつて両手を膝に載せて顔を伏せた。

「じゃあなアシウト。二千年後に来るからよ」

「あ、はい」

そう言つて、ヴォルカヌス様はトカゲ亜人の作った道を通つて去つていった。

まるで炎の嵐あらし。そんなことを思いながら、俺はヴォルカヌス様の背中を見送つた。



リザード  
蜥蜴族。

亜人の一種でトカゲのような風貌ふうぼうであり、強靱な腕力と脚力を持つ。体色は緑か茶色で、個体によつて色が異なる。

個体はオスとメスに分かれ、交尾によりメスは卵を地中に産む。

リザード族は寒さに弱く、冬になると暖かい場所に移動するか、移動が困難な場合は冬眠することもある。

ちなみに、オーベルシュタインの冬は三年に一度。俺はまだ冬を経験していない。

以上がオーベルシュタインに存在するリザード族の特徴だ。

ただ、今回俺の村に来た人々はリザード族とは少し違う。『緑龍の知識書』には、こう書いてあつた。

サラマンダイ  
炎蜥蜴族。

神話七龍にして、この世界に『熱』をもたらした偉大なる『焔龍ヴォルカヌス』の加護を受けた希少種族。

最大の特徴は、その真紅の鱗と、トカゲから進化した龍を思わせる顔を持つこと。寒さを克服し、自らの体温を上昇させて炎を吐くことも可能。

戦闘力もリザード族を上回り、巫人の中でもトップクラスの強さを持つ。  
また、彼らは上下関係に重きを置いている。

彼らの理論によると、この村でいうなら、新参者である彼らの立場は一番下。ハイビク  
シーたちより下である。

新しく村に来たサラマンダー族は総勢七十人。

オスが四十人、メスが三十人と、村にいる種族の中では最大の数だ。

渡りに船とはこのことだろうか。サラマンダー族にはエルダードワーフの補助を任せた。  
これにより、銀猫族は力仕事から外れ、村の施設や家事などの仕事を専門とするように。

サラマンダー族とエルダードワーフの相性はとてもよかった。

ある日、図書館建設中の光景。

「おう、そっちを支えてろ!!」

「へい、親方!!」

「おいこつちも手え貸せや!!」

「ウッス!!」

「おい新入り、森まで資材確保に行くぞ!!」

「へい!!」

と、サラマンダー族の威勢がいいので、ドワーフたちがのびのびと指示を出している。

## 立ち読みサンプル はここまで

銀猫族は若い女性だったから、どうしても遠慮があったようだ。しかも、先ほど述べた  
通りサラマンダー族は上下関係に厳しいため、エルダードワーフたちに逆らうこともない。  
エルダードワーフたちは、いい部下ができたことを喜び、仕事終わりにエールを馳走  
したり、それぞれの家に招いて宴会をしたりして。

これにより、村の建築仕事は大いに捗った。

顔は怖いけど、サラマンダー族っていい人ばかりだ。

ただし、ちよつと困ったこともある。

「アシユトの叔父貴、お疲れ様です!!」

「お疲れ様です、叔父貴!!」

「ど、どうも」

サラマンダー族、俺のことを『叔父貴』と呼んで全力で挨拶してくる。

なんでも、ヴォルカヌス様が認めた兄弟分だから、らしいけど……いちいち足を止めて  
お辞儀しなくていいのに。しかも、中腰になって両手を膝に置くスタイル。

ちなみに、サラマンダー族の各種族への呼び方はこんな感じ。

銀猫・魔大族の少女たちは『お嬢』、ドワーフたちは『親方』、ハイエルフたちは『姉  
御』、子供たちとハイビクシーたちは『さん』付け、バルギルドさんとディアドさんの  
ことは『兄貴』と呼んでいる。シェリーとミュディは『姐さん』だし……よくわからん。